

根拠を明らかに ～読むことから書くことへの指導～

国語 第2学年
小松市立芦城中学校・教諭

1 事例の概要

本校では3年間、「指導と評価の一体化による授業の改善～評価を生かした個に応じた指導の充実～」の研究実践に取り組んできた。生徒の実態調査の結果から、本校の生徒の学習に対しての姿勢が前向きであることがうかがえる。さらに、「学び方ハンドブック」（シラバス）を提示し、より主体的な学びを促している。

国語科の授業も、落ち着いた授業態度が見られる。しかし、5月初めに行った国語に対する意識調査の結果、「国語の勉強が好きだ」という問いに対し、半数以上が否定的な回答をした。積極的に学ぼうとしている生徒もいるが、関心を示さず受け身的な学習態度の生徒が見られるのも現状である。

この現状をなんとかしたい、「わかる」喜び、「学んだこと」が「生きる」実感を持たせたいという思いから、「読むこと」と「書くこと」の関連を重視した単元「根拠を明らかに」を設定した。

「読むこと」の教材で模範となる表現に触れさせ、それを生かして効果的な文章を書く力を高める実践を試みた。

A-1 研究の内容

A-2 学び方ハンドブック

2 実践内容

(1) 単元の目標

- ① 事実や根拠を確かめながら文章全体の構成をとらえ、筆者の意見を読み取る。筆者の表現を自分の表現に役立てることができる。
- ② 根拠を明確にし、構成を工夫して自分の考えを文章にまとめることができる。

(2) 指導上の工夫点

- ① 学び方ハンドブック（シラバス）の利用
 - ・ 学び方ハンドブックに単元の学習計画を載せ、生徒に見通しをもたせるようにした。本時の学習の確認や自分の取り組むべき課題がはっきりし、意欲の喚起や自主的学習に役立つと考える。
- ② 説明的な文章の学習における工夫
 - ・ 読むときに必ずテーマ（指示語や接続語、キーワード等）に沿って線を引くようにさせる。
 - ・ 文章の構成、事実とその根拠が明記できるワークシートを準備する。生徒の記入の状況から、理解の様子が把握でき、個別の支援もしやすい。また、シートにすることで視覚的にも説明的な文章の全体構成が理解でき、次の「書く」教材にも役立てることができる。
- ③ 「書く」教材における工夫
 - ・ 目的、題材を参考のために提示する。「意見（立場）」、「事実」、「根拠」、「予測される反論」など構想を書き込むワークシートを準備する。実際に書く時の助けになり、机間指導の中でアドバイスもしやすい。
 - ・ 相互評価を行うことで自分の学びを確認するとともに互いの思いを理解する場を設ける。

B-1 指導計画・評価計画

3 指導の実際

段 階	学 習 活 動 ◇予想される生徒の思考の流れ	教師の指導・支援 評価場面・評価の方法
展 開 40分	③第2のまとまりの1つめを読み、内容を理解する。 ・問いと答え、根拠について発表し話し合う。 ・ワークシートに記入する。 ◇根拠は、分析結果と歴史に注目すればいいのだな。 ④2～4つめを読み、順を追って内容を理解する。 ◇今度は自分の力でやってみるぞ。 ・一人学習	・問い(□)に対する答えとその根拠に、読みながら線を引かせる。 根拠は、調査してわかったことと歴史的事実から見つけさせる。 ・1つめの部分と同様に、読みながら線を引き、ワークシートに記入する。 筆者の問いに対する答えとその根拠を見つけている。【読む】観察・ワークシート

C-1 指導案

C-2 ワークシート1

C-3 ワークシート2

C-4 評価カード

4 成果と課題

(1) 成果について

- ① 生徒自身が目的意識をもって授業に臨むようになり、その取り組みから達成感や満足感、次への意欲をもてるようになった。
- ② 説明的な文章の学習を重ねたことで、文章構成や論の展開について理解がより深まり、既習が生きていることを生徒が実感できた。また、表現の意図や効果について考える意識が育ってきた。
- ③ ワークシートや活動時間・活動形態の工夫により、一人一人がよく集中して自分の力でやり遂げようとする場面が見られ、授業の充実感につながった。
- ④ 段階を踏んだ手だて指導により、「書き方」を身に付けることができ、構成をしっかりと考えさせたことにより、原稿用紙に向かうと筆が進み、書くことへの抵抗が薄れ自信につながった。
- ⑤ 「読むこと」と「書くこと」の関連を重視したことにより、生徒の中に筆者の書きぶりに学ぼうとする意識が芽生えたことが伺える。読解の対象としてきた教材文の見方が広がり、今後の学びがより豊かなものになることが期待できる。

(2) 課題について

- ① Cの評価と思われる生徒もいるが、相互評価し合う場面では真剣に友達の意見文を読む姿が見られた。今後、彼らの中に芽生えるものがあることを期待したい。
- ② 意見文で取り組んだが、内容はそう深いものではない。今回は「書き方を学んだ」のであり、今後生徒の中で心を揺さぶられる体験や自己を見つめるきっかけがあったとき、本当の思い、生きた文章を書くことにつながっていくのではないかと考える。
- ③ 国語科以外の取り組みとして、週1回朝自習の時間に、新聞記事を読んだ感想に取り組んでいだが、書くための条件を設定するなどして力を高めていきたいと考えている。

1 事例の概要

本校では、平成15・16年度にわたり文部科学省学力向上フロンティア事業の委嘱を受け、「一人ひとりの『ゆたかな学力』を育む学校づくり」をテーマとして、研究実践を行ってきた。そして、17年度からは、この2か年の研究実践を継続・発展させる形で、3か年にわたる学力向上拠点形成事業の指定を受けることとなった。“学習意欲の向上と学習習慣の定着を目指して”を新たにサブテーマに掲げ、さらに充実した研究実践に取り組んでいる。

15年度からの研究の中では、社会科においても教科部会を中心にさまざまな取り組みをおこなってきた。その結果、生徒の主体的な学習を促す指導のために、“育てたい力”として4つの視点を位置づけた。

A-1 学校研究の経緯

A-2 社会科における育てたい力

2 実践内容

(1) 単元の目標

- ・企業活動に関心を持ち、意欲的に調べようとしている。(社会的事象への関心・意欲・態度)
- ・大企業、中小企業の特徴を知り、それぞれの企業について多面的に考察できる。
(社会的な思考・判断)
- ・企業に関する資料の収集や分析をもとに、自分の生き方に照らし考えをまとめ発表できる。
(資料活用の技能・表現)
- ・企業の活動の目的を理解し、その知識を身につける。(社会的事象についての知識・理解)

(2) 指導上の工夫

- ①『社会科に関心をもち、意欲的に取り組む力を育てる』工夫
 - ・各学年においてキャリア教育の視点に立ったプログラムを作成
 - ・「人間関係形成能力」「情報活用能力」「将来設計能力」「意思決定能力」のキャリア教育の視点から、各学年の発達段階に応じて系統化された「教科・道徳・特別活動・総合的な学習の時間」の各領域におけるつきたい能力とそのための具体的実践例の設定
 - ・社会科における進路学習や将来設計との関わりを意識した実践
- ②『社会科の読解力を育てる』工夫
 - ・「読む力と考える力を育てる」・「情報を比較分析し、適切に表現する力を育てる」を意識した実践
- ③『基礎的・基本的事項の定着を図る』工夫
 - ・授業の最初の復習5問テスト
 - ・授業のキーワードを書いたフラッシュカードを利用した見やすい板書

活動例

学習単元：3年公民分野、第3章企業を通して経済を考えよう「企業の活動の目的」(帝国書院)

企業の活動目的について理解し、企業の規模についての学習をした。企業活動の目的や大企業中小企業それぞれの長所と短所を理解した上で、読み物資料を用意し、その資料をもとに考察する学習をおこなった。この学習活動はキャリアプログラム(B-1)に位置付けられている。

B-1 キャリアプログラム

B-2 社会科における読解力

B-3 基礎基本の定着

3 指導の実際

学習内容に関して	○教師の働きかけと生徒の反応	支援○ 評価◎
<p>基礎基本の定着を行う。 (知識・理解)</p> <p>企業に対して多面的に考えさせる (思考・判断)</p> <p>キャリア教育の視点をもたせる (今日的課題)</p>	<p>○教師の働きかけと生徒の反応</p> <p>復習 5 問テスト</p> <p style="text-align: center;">様々な仕事のイラストから考えよう</p> <p style="text-align: center;">～ 企業について考えよう (目的・形態・特色など) ～</p> <div style="display: flex; justify-content: space-between;"> <div style="width: 45%;"> <p>『将来、皆さんが、もし企業に就職するとしたら・・・?』 (教師)</p> <p>○『大企業に務めるAさんも、中小企業に務めるBさんもそれぞれ悩みがありそうだね。』</p> <p>○『ここに登場するCは実は先生自身なんだ。』</p> <p>○『それはね・・・、みんなだったらどう答える?』</p> </div> <div style="width: 45%;"> <p>『絶対に大企業がいいと思う。』『たくさんお金をもらえそうだから。』 (生徒)</p> <p>○Aは『人が多くて自分の力を発揮できてないし、好きな機械いじりができない。』と悩む。</p> <p>○Bは『忙しくて家族サービスもできないし、倒産の心配もある。』と悩む。</p> <p>○『え～!! そうなんだ!!』</p> <p>○『じゃあ、先生はAとBにどう答えたの?』</p> <p>○『苦しくても自分の好きな仕事ができるほうがいいなあ。』</p> </div> </div> <p style="text-align: center; border: 1px dashed black; padding: 5px;">あなたはどう感じましたか。どちらの生き方に共感できますか</p>	<p>○前時の復習</p> <p>◎企業の目的を理解している。</p> <p>◎企業の特色を多面的にとらえている。</p> <p>○資料を配付・資料範読 (C-2)</p> <p>○注釈をつけて詳細も紹介する。</p> <p>A (大企業・営業)</p> <p>B (中小企業・技術者)</p> <p>C (担任・教師)</p> <p>◎自分の生き方に照らしながら考えをまとめようとしている。</p> <p>○正解を求めるのではなく、自由に意見を書かせる。</p>

「自分なら・・・」と自らの生き方に照らし考察することで、様々な考え方や意見が出された。単に、大企業は○○、中小企業は□□という概念理解にとどまらず、この後の学習単元 (経済構造、企業競争、雇用の問題、景気変動など) へのつながりという面でも学習の効果が見られた。

C-1 指導案

C-2 読み物資料

C-3 生徒感想



キャリア教育推進
わく・ワーク体験

4 成果と課題

① “育てたい力”として4つの視点から

- ・教科部会を中心に“育てたい力”について共通の認識をもち、教科として向上に努めた。
- ・具体的な取り組みについては丁寧に分析・総括し、以降の指導実践に活かすことができた。
- ・学校研究と系統的なつながりをもたせた実践指導やキャリアプログラムの構築が課題である。

②評価の工夫から

- ・生徒自身が行う、単元ごとの「学習ふり返りカード」への記入や、定期テストの自己採点表等の取り組みを通じ、生徒自身が自分の関心・意欲や知識・理解について系統的に把握し、学習にいかすことができた。
- ・丁寧な評価を、どのようにして個に応じた指導にいかしていくかが課題である。

③学力向上の視点から

- ・生徒アンケートでは、社会科が好きな理由として「学習の内容がよく分かるから。」「調べたり、考えたりするのが楽しいから。」というものが多く挙げられた。基礎学力調査のデータの継続的、系統的な分析を指導にいかそうとしてきた成果と考える。
- ・授業改善の視点から、具体的実践についてももしっかり総括し、さらなる工夫改善を行っていく必要がある。

D-1 成果と課題

D-2 学習ふり返りカード

D-3 自己採点表

1 事例の概要

これまで本校は、「人権教育」「道徳教育」を中心に、豊かな心を育むことに重点を置き研究を進めてきた。一人一人が存在感を持ち、互いに認め合う集団づくりを通し、様々な生徒の活動に取り組んできた。その活動の中で、生徒にとってまず保障されるべき人権は、教科における基礎基本を身につけることと強く感じられた。教科の教育の原点に立ち返り、生徒が「確かな学力」を身につけ、確かな学びをめざす教科指導の必要性を感じるに至ったのである。

そこで、学校全体で「基礎・基本」を大切にされた教科指導に重点を置き授業を進めていくことになった。まずはじめに、各教科・各学年における「学習の手引き」を作成して評価の観点や評価規準を示し、その実現のための学習活動、学習方法を明らかにしていくことにした。数学科においては、学習形態や評価方法を工夫することによって、生徒の主体的な学習の向上を図り、互いに学び合う授業づくりを目指して実践することにした。

2 実践内容

(1) 「学習の手引き」の活用

「学習の手引き」をもとに、生徒・保護者・指導者が学習方法や評価の観点について意識して学習することを目標に取り組むことにした。授業開きのときはこれを利用し、生徒・保護者に学習や評価がテストだけで行われるのではなく、授業を通して総括的に行われることを知らせることにした。また、指導者自身は評価の観点や評価規準を意識して、評価方法と達成度を明確にし、授業改善に生かすことができると考えた。生徒は、自らを振り返り、基礎学力の成果を意識することができる。これによって学習意欲が向上し、自分の考えを表現するなどより主体的な学習に向かうことを期待した。保護者に対しても「学習の手引き」を参考にして、通知表における4つの観点についてどんな力をつけたいのかなど説明責任を果たす一助になると考えた。

(2) 自分の考えを表現できるような指導の工夫

① 授業形態の工夫

1時間の授業の流れをパターン化することにする。学習の見通しが持て、生徒の主体的な学びに結びつくと考えたからである。また、習熟度別少人数授業とはいっても生徒の実態は様々であることから、グループ学習(4人1組)の形態を取り入れ、生徒は相談しながら課題解決を図り、お互いに学び合いを進めるようにする。このとき、グループでは、生徒は自分の考え方を適切な方法で説明しようとし、互いにわかるまで話し合いをすることができ、学び合いを深め、自分の考えを表現する場となると考えられる。

② 自己評価の工夫

授業の終わりに小テストと自己評価を行う。自己評価は、顔マークと一行感想にする。顔マークを取り入れたのは、点数や言葉の評価では自分の思いを正直に表現できない場合や、文章だけでは微妙なニュアンスが伝わらない場合があるので、なるべく自分の思いを伝えるため、顔の表情で表すことにする。一行感想では、一言で授業を振り返ることから、授業のねらいの焦点化や一番感じたことを表現することができると考えた。

3 指導の実際

段階	生徒の活動	予想される生徒の反応	・指導上の留意点と◎評価(方法)
導入	1 $a\sqrt{b}$ の形に変形	・一斉に大きな声で発表する	・頻度の多い変形を出題
展開	2 課題を知る		
	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-bottom: 5px;"> 学習課題 ☆根号がある式の乗法や除法をマスターしよう☆ ～根号がある式の乗法や除法を、根号使用のきまりに従って計算できるようにしよう～ </div> <div style="display: flex; justify-content: space-between;"> <div style="width: 30%;"> <ul style="list-style-type: none"> ・教科書などを調べ、自力で考える。 ・グループ学習をする </div> <div style="width: 30%;"> <ul style="list-style-type: none"> ・$\sqrt{12} \times \sqrt{20}$ の計算は、はじめにかけてから変形。 ・まず変形してからかける。 ・除法のときは、分母の根号をなくすことを忘れない。 ・あらかじめ変形してから計算をしたり、分母の$\sqrt{\quad}$をなくしてから計算する方法がよいことに気がつく。 </div> <div style="width: 30%;"> <ul style="list-style-type: none"> ・根号の中を大きな数にしてから変形をしている生徒には、もっと能率的にかつ正確に計算ができるようにする方法を考えさせる。 ◎根号をふくむ式の乗法や除法の計算に関心を持って取り組もうとする。(話し合いの発言) ・能率的にかつ正確に行うにはどうすればよいかを中心に進める。 </div> </div>		
まとめ	4 小テストと自己評価	・本時の学習内容の問題を解き、一行感想を書く。	◎根号をふくむ式の乗法、除法について理解している。(小テスト)

C-1 指導案

4 成果と課題

(1) 「学習の手引き」の活用

4つの観点と関連づけて、授業のねらいを吹き出しの中にタイトルとして毎掲載せた。そのことによって、生徒にとっては、学習のねらいがわかってよかったという意見が75%もあった。

今後は、単元ごとの「学習の手引き」の充実を図りたい。

(2) 自分の考えを表現できるような指導の工夫

① 授業形態の工夫

グループ学習について「有効だった、よかった」と思う生徒は100%であった。わかった生徒が、グループの友人に適切な方法で説明し、それを聞く生徒は、納得しようと質問を繰り返し、お互いの学び合いになったと考える。表現力をつけることについては、例えば根号をふくむ式の計算は、文字の計算と方法が似ていると友人に説明するなど、それぞれの工夫がみられた。パターン化については、生徒が見通しを持つことができ、主体的な学びや安心感につながった。

② 自己評価の工夫

生徒は、思いを様々な顔の表情で表すようになった。小テストは全問正解ではなかったが、グループで相談して理解できると、満足感をニコニコ顔に、逆に全問正解であっても内容が難しく、疑問や不安が残る場合は、泣き顔で表現した。生徒の思いが伝わるような気がした。顔マークと一行感想を記入することは、自分の考えを振り返ることができたとする生徒が85%、理解度を知ることができたとする生徒が90%であり、授業の確認になったと思う。そこで出てきた生徒の疑問や不安を次時の授業で取り上げ、生かすようにしているが、今後さらに生徒の希望に応えていきたい。

D-1 生徒の感想

5 その他

*参考文献 「中学校数学科 新しい評価の在り方」 長崎 栄三編著 明治図書

1 事例の概要

これまでは、科学的な思考、技能・表現、知識・理解の評価を行う場面において、生徒自身の次への学習意欲や内容の深化につながらない場面が少なからずあった。そこで、生徒の学習への意欲が高まるために評価の工夫を、様々な場面で意図的・計画的に実践し、また生徒同士の相互評価も取り入れ、生徒が互いに高めあう授業の実践を行った。

A-1 事例の詳細

A-2 事例の詳細の関連資料

2 実践内容

(1) 単元の目標

- ・ 静電気の実験、磁石のまわりにできる磁界の観察を積極的に行っている。(関心・意欲・態度)
- ・ 観察実験により、問題を積極的に解決しようとしている。(関心・意欲・態度)
- ・ 電気抵抗が金属の種類によって違うことを説明できる。(科学的な思考)
- ・ 誘導電流の発生のしくみを理解し、強くする方法を考えることができる。(科学的な思考)
- ・ 回路の設置や電流計・電圧計を正しく操作できる。(観察・実験の技能・表現)
- ・ 実験に応じた回路を的確に組み立てることができ、結果を適切にまとめることができる。(観察・実験の技能・表現)
- ・ 電流・電圧の関係や規則性について理解している。(知識・理解)
- ・ 電流による磁界や誘導電流について理解している。(知識・理解)

(2) 指導上の工夫点

- ・ 小單元ごとに学習内容の定着を図るために、復習テストを行い生徒の理解度を把握する。特に、この単元では計算を繰り返し行わせることで、生徒の実践的な力を育成する。
- ・ 生徒による実験レポートの評価において、表現力を育むための項目(創意工夫した点やレイアウト)も重視する。例えば、方法・結果・わかったことをわかりやすく表現する工夫を促す。さらに、優れた実験レポートは、掲示や授業中に紹介することで、意欲の喚起や3年間の段階的・系統的な指導に役立てる。
- ・ 実験レポートに自由記述欄を設定し、生徒の素朴な疑問など内面を探る。例えば、「先生へのメッセージ欄」などがある。これにより、生徒の理解の状況や思考面の把握、あるいは発展的な視点で事象を観察していることがわかる。時には、次への学習課題として使用することで、評価と指導の一体化が図れる。
- ・ 単元目標を操作技能の習得に設定した場合は、パフォーマンステストを行い、生徒を受験者や審査員にする。これによりお互いの操作をじっくり観察し、良い点や優れた点を指摘させることで、自らの操作技能の向上を図らせることができる。
- ・ パフォーマンステスト終了後、生徒同士による話し合いの場を設けることで、学び合いの学習が生まれ、より高い操作技能の定着につながる。また、この学び合いが生徒同士の相互評価の質を高め、個々の生徒の自信につなげることができる。

B-1 単元計画

3 指導の実際

学習の流れ	時間	指導の留意点（教師の支援◇、評価【】）
3 テストを実施する。	25分	【評価】 正しい操作手順で回路を組み立てることができる。 （観察・実験の技能・表現） 観点を意識して審査している。（知識・理解） ◇ 的確にテストが実施されるように、机間指導を行う。 ◇ 提出用の用紙に、自分への評価を書き写させる。また、苦手な操作・他の生徒の良かった点を考え記入させる。
4 テストを終了し、お互いの評価を確認する。	5分	【評価】 操作技術向上に向けて、評価観点に基づいて話し合いが行われている。（観察・実験の技能・表現）

C-1 指導案

C-2 ワークシート

4 成果と課題

(1) 成果

- ・ 生徒が復習テストに取り組んでいる様子や状況を把握することで、授業改善に役立った。また、生徒自信も自分の学習内容の理解状況を的確に知ることができた。
- ・ 静電気の実験レポートでは生徒の記入箇所を多くしたところ、結果や考察において表現や見やすさに工夫をする姿が見られた。1年時からの継続した指導の成果と考える。また、表現力やレイアウトで優れた実験レポートを授業の中で提示することで、本人や他の生徒が、次回でのレポート作成に意欲をもって臨めたようである。
- ・ 自由記載のメッセージ欄は、日頃質問することをためらっている生徒が、授業の中での疑問や関心が高い事柄を書いており、教師として学習状況や興味関心の有無を知る有効な手段であった。次時への課題として扱うことのできる内容もあり、科学への知的好奇心の喚起につながった。
- ・ 規則性や計算が中心となる本单元の中で、操作技能を高める実技テストを導入することは、本单元以外の観察実験にも良い影響を与え、生徒同士の学び合いを高める機会にもなった。また、生徒自身が実技テストの審査員になることで、関心意欲を高める学習になった。
- ・ 実技テスト後の話し合いの場では、生徒が互いに教え合い、学び合うことで、全員が確実に操作技能を向上させることができた。生徒の感想などを読むと、多くの生徒が肯定的に考えており、学校評価においても、「理科が好き」「興味関心が高まった」という割合が増えており、操作技能の向上とともに学習意欲の持続につながることができた。

(2) 課題

今後は、復習テストの内容をさらに吟味し、より学習の定着状況を把握できる内容に改善していく必要がある。また、生徒の操作技能をさらに高める方法として、多くの場面で実施すること、各单元で時間的にゆとりをもって行うこと、学習意欲を持続する課題設定の工夫を図る必要がある。

今回、「電流の性質とはたらき」で授業実践を試みたが、学習後の生徒同士の話し合い・学び合いによる効果は認めつつも、授業の中で多くの時間を費やしてしまう。したがって、本実践のように知的好奇心の喚起や学習内容の確実な定着のための手法を取り入れるための教育課程編成を行い、別单元でも検証を行いたい。

長唄「勸進帳」

音楽 第2学年

小松市立中海中学校・教諭

1 事例の概要

日本の伝統音楽や、和楽器の学習はCDやビデオ鑑賞だけに終わる場合が多く、実際に楽器を演奏する表現活動がなかなか難しいのが現状である。しかし、本校では計画的に三味線をそろえることによって、グループで演奏することが可能になってきた。そこで、鑑賞と表現を組み合わせた題材を構成することによって、あまりなじみのない伝統音楽を身近に感じることができるようにこの事例に取り組んだ。

2 実践内容

(1) 題材の目標

三味線の独特な音色を感じ取り「寄せの合方」の表現を工夫する。

(2) 指導上の工夫点

① 和楽器を取り入れた学習の工夫

音楽の授業に和楽器を取り入れることが求められて数年経つが、指導者に演奏の技術がない、値段が高いなどいろいろな問題があり、なかなか簡単には進まないのが現状である。本校では数年前から1年生で箏、2年生で三味線を扱っている。箏は2面しかないので全員の生徒が楽器に触れることは難しい。三味線は4年計画で12棹そろえ、3人グループで練習することが可能である。そこで、三味線を実際にさわってみて音を出し、簡単な曲を演奏することで、日本の伝統音楽や和楽器に親しむことができるのではないかと考え、2年生で三味線の実技を取り入れた授業に取り組んでいる。

教材の長唄「勸進帳」は地元ということで生徒達の関心が高く、さらに小松市では毎年当番校が歌舞伎「勸進帳」を上演するということもあり、大変親しみやすい教材である。使われている楽器の中でも特に重要な三味線を取り上げ、聴くだけでなく実際に演奏してみること、日本の伝統音楽や和楽器への関心意欲が高まるよう配慮した。

② 意欲を向上させる工夫

- ・簡単な練習曲を演奏した後、習熟度によるグループ分けをし、個に応じた指導する。
- ・ゲストティーチャーを招き、実際に演奏してもらったり、演奏の仕方についてアドバイスをもらったりして、楽器に対する抵抗感を少なくする。
- ・小松市の「古典教室」で毎年2年生が歌舞伎「勸進帳」を鑑賞することになっているので、その事前学習という意識をもたせる。
- ・これまでの学習の総まとめとして歌舞伎「勸進帳」をビデオで鑑賞することにより、日本の伝統音楽をより身近に感じさせる。
- ・グループ活動を本校の研究で取り上げている「キャリア教育」の視点で捉え、互いに助け合いながら演奏に取り組む場を設定する。

③ 評価の工夫

ワークシートに1時間ごとに自己評価を書き込むことで、目標の確認と評価ができるようにした。

3 指導の実際

配時	学習内容	生徒の学習活動	支援（・）と評価（○）	キャリア教育の視点
導入 5分	学習への導入	・既習曲を合唱する。	・音楽の学習への雰囲気をつくる。	
展開 40分	前時の振り返り 今日の目標の確認 「寄せの合方」の演奏 三味線のグループ練習	・前時の学習を確認し、感想を発表する。 「寄せの合方」を演奏しよう ・ゲストティーチャー（GT）による模範演奏法による音色の違い スクイバチ、ウチ、スリ ・3人グループで練習 習熟度でグループ分け互いにアドバイスGTに聞こう	・前時の自己評価カードの感想を紹介し意欲を持たせる。 ・自己評価カードの項目も合わせて確認するよう、声をかける。 ・集中して聴ける雰囲気をつくる。 ○三味線の独特な音色を感じ取り、表現を工夫している。（観点2-②）	・グループで互いに助け合って練習を進めることができる。（人間関係形成能力）
まとめ 5分	まとめ	・自己評価カードに今日の評価と感想を記入。	・今日の学習活動を振り返らせる。	

C-1 指導案

C-2 楽譜

4 成果と課題

(1) 成果

- ・表現と鑑賞を組み合わせることで、あまりなじみのない日本の伝統芸能をより身近なものに感じることができた。
- ・表現と鑑賞を組み合わせることで、少ない時数で二つの活動ができる。
- ・三味線の表現活動のあとで「勸進帳」を鑑賞することにより、授業に対する集中度が増した。
- ・ゲストティーチャーを活用することで、さらに生徒の関心意欲が高まった。
- ・実際に演奏することによって三味線などの和楽器が身近に感じられるようになった。
- ・簡単な曲では物足りなく、本当の歌舞伎の曲を演奏したいという意欲が高まった。
- ・グループで互いに助け合いながら和やかな雰囲気で行うことができた。

(2) 課題

- ・3人に1棹ではやはり楽器に触れる機会が少ないので、できれば2人に1棹が望ましい。
- ・糸が切れたり、調弦が狂うなどのトラブルが起きると教師が対応に追われ、十分に指導したり生徒を見取ったりすることができない。
- ・適切なゲストティーチャーを必要な時に招くことが難しい。

きりえ、大作に挑戦！

～ 表現を広げ、高める選択授業 ～

美術 第3学年
志賀町立志賀中学校・教諭

1 事例の概要

美術科の授業時数の削減により、内容の精選・関連づけ・一体化が求められている。本校では1学年で基礎・基本の習得、2学年では発展課題を、3学年は卒業制作の版画制作を中心としている。必修授業で取り組める作品の大きさは縮小され、題材の数は減らさざるを得ない。そのためか、必修授業では物足りず選択で美術を選ぶ生徒が多い。必ずしも美術が好きな生徒が集まるとはいえない選択授業であるが、本校では美術に意欲的な生徒が毎年多く集まってくる。そこで、選択授業の題材を必修授業の基礎的能力の定着、また表現の幅を広げ高めることに重点を置き取り組んできた。

〈美術科選択時数と題材〉

学年	時数	前年度の必修授業の題材	今年度の選択授業の題材
1学年	30時間	小学校での版画実習	年賀版画コンクールに応募しよう
2学年	35時間	レタリング・色の学習・技法実習	ポスターコンクールに応募しよう
3学年	35時間	マンガをきりえで表現しよう	きりえ、大作に挑戦！

3学年の「きりえ、大作に挑戦！」は、2年生の3学期の題材を発展させたものである。必修授業と違うところは、主体的なモチーフ選びと作品の大きさ、表現を工夫することである。モチーフは学校生活や修学旅行、地域の行事、身近な風景など自分が表現したいもの、心を動かされたものを構図やアングルを意識して写真に撮らせた。下絵の図案作成は重要になるため、安易に妥協せず慎重に検討するよう促した。また、作品の大きさをA3で制作することとし、作品展に応募することを目標に意欲を持続させ、はげまし合いながら取り組ませるようにした。表現の工夫では、様々な彩色方法を知らせるとともに、対話しながら個々の表現に応じたアドバイスを心がけた。

A-1 年間指導計画

2 実践内容

(1) 題材の目標

2年生でのきりえ制作を踏まえ、より主体的に取り組む姿勢を養うとともに表現の幅を広げ、表現の技能を高める。

(2) 指導上の工夫点

① 主体的活動の工夫

- ・授業時間を超えたモチーフの収集活動（放課後・修学旅行・家庭生活など）
- ・下絵の図案決定までの時間確保

② 表現技能を高める工夫

- ・多様な表現の紹介（作品集・生徒作品、彩色方法）
- ・個に応じたアドバイス

③ 制作段階ごとの評価の工夫

B-1 単元ガイダンス

B-2 指導と評価

3 指導の実際

段階	配時	学習内容・活動	指導上の留意点、評価 (◇) と支援 (◎)
導入	5	1 前時の活動をふり返る。	・作品の進捗を確認する。
展 開	40	2 本時の活動を確認する。	
		効果的な配色や彩色方法を考え、仕上げ方を工夫しよう	
		3 彩色の用具を検討する。 ・台紙に直接絵の具で彩色する。 ・トータルカラーや和紙を台紙に貼る。 ・薄手の紙やトレーシングペーパーに彩色し、台紙に貼る。	◎彩色の用具と方法を知らせる。 ◎机間支援でアドバイスしながら、一緒に検討していく。
		4 配色を考えながら仕上げていく。	◇効果的な配色や彩色方法を検討し、仕上げ方を工夫している。(創造的な技能) ◎自分なりの方法を見つけられない生徒には、先輩の作品や既習の資料等を提示する。
まとめ	5	5 授業の振り返りをする。	・制作を振り返り、仕上がりを確認する。 ・次時の作業の見通しを立てる。

C-1 指導案

C-2 制作手順

C-3 生徒作品

4 成果と課題

(1) 成果

3年生の選択題材でこの題材に取り組み3年目になる。年々モチーフの対象が広がり、「これを表現したい」という生徒の思いや意欲も強くなってきている。根気が要り、時間のかかる題材なので、授業では足りない時間を夏休みや放課後に補い、ようやく完成させることができる。それだけに完成の喜び・達成感は大きい。全員が応募を目標にがんばり、そのうち何名かは高い評価を受けることができ、さらなる自信にもつながった。きりえ表現のおもしろさや魅力を味わいながら、完成度の高い作品を目指す姿勢が身についてきた。

(2) 課題

選択授業はその状況により条件が違ってくるので、時間や内容等を工夫しなければならない。選択してくる生徒はすべてが意欲的な生徒とは限らず、生徒自らが課題を求め活動する授業は現実にはなかなか難しい。しかし、生徒の自主性や表現能力を育て、高めるためにも必修とは違う魅力ある学習内容や活動の多様性を目指し、情報交換しながら今後も題材の工夫改善をしていきたい。また、題材と評価を整合させるよう観点の見直しも検討していかなければならない。

1 事例の概要

本校では、「学ぶ意欲を育て、学力向上につながる指導法の工夫 ～基礎・基本の見直し～」を研究テーマに設定し、各教科において基礎・基本を見直すことで基礎的・基本的事項の定着をはかりながら学ぶ意欲の育成と学ぶ意欲を引き出す指導法の工夫に取り組んでいる。保健体育科では、「各種の運動の特性に応じた楽しさや喜びに触れることのできる授業」、「友だちと仲よく運動することを通して運動の課題を解決していくことのできる授業」、「適切な指導と評価を実施することで次の指導につなげていくことのできる授業」の実践を心がけている。この授業を積み重ねていくことで一人一人が自ら運動をする意欲を高めていくことができると考えている。

2 実践内容

(1) 単元の目標

- ・球技の特性に関心を持って意欲的に学習に取り組み、互いに協力して練習やゲームに取り組もうとする。また、勝敗に対して公正な態度をとり、健康や安全に留意して学習を進めようとする。
(運動や健康・安全への関心・意欲・態度)
- ・チームや自己の能力にあった課題を持ち、課題解決を目指して練習方法やゲームの仕方を工夫する。
(運動や健康・安全についての思考・判断)
- ・種目の特性に応じた個人的技能を高め、集団的スキルを身につけて相手に対応したゲームができる。
(運動の技能)
- ・種目の特性や練習方法を理解するとともに、ルール及び審判の方法を身につけている。
(運動や健康・安全についての知識・理解)

(2) 指導上の工夫点

① 基礎・基本の定着

生徒の「できた」、「わかった」という思いを大切にしたい。一つ一つの小さな感動の積み重ねが学ぶ意欲を育成していくと考えている。そのためには導入や展開における工夫とともに、基礎・基本を見直し、それを授業で活用し、評価していくことで定着をはかり、学ぶ意欲を育てていく。

② 評価規準の作成と見直し

生徒は、「ほめられた」、「認められた」と感じたときにさらに学習意欲を喚起させていくと考えられる。一人一人のよさや可能性に目を向け、適切な評価を実施していくことが必要である。そのためには、単元全体の評価計画のもと、一時間ごとの評価規準を明確にした上で授業にのぞむとともに、常に評価規準の見直しをはかっていく。

③ 学習カードの活用

学習の計画を立てたり、振り返ったりしながら主体的に進めていくには、学習カードの活用が効果的であると考えている。できるだけ短時間で記入できるように、全単元で同じ学習カードを使用し、課題を把握し、解決に向けて取り組み、振り返って次の授業につなげるという流れで実施している。

3 指導の実際

(1) 学習指導法の工夫

- ・バレーボールではアンダーハンドパス、バドミントンではアンダーハンドストロークを中心に基礎的・基本的な技能の習得のために、毎時間練習に取り組むようにした。
- ・前半は「自分のコートに落とさない」というテーマで個人的技能の向上を目指し、いろいろな練習内容から選択して取り組み、ゲームでラリーが続いた時の楽しさを味わう。後半は「相手のコートに落とそう」というテーマで攻撃するための集団的技能の習得を目指し、練習方法を考えて工夫して取り組み、攻撃が決まった時の楽しさを味わわせたいと考えて授業を構成した。
- ・グループの中でゲームのメンバーを固定せずにゲームは三試合の結果で勝敗を決定すること、また学習カードに友だちから受けたアドバイスを記入することで教え合う活動を活性化させていきたいと考えた。
- ・第三次5時間扱いの3時間目(主な学習内容と活動)

グループ編成 4～5人のグループ(バレーボール4、バドミントン4)

段階	主な学習内容と活動
導入 (10分)	1 集合し、あいさつをする。 2 チームごとに分かれ準備運動をする。 3 チームごとに個人的技能の練習をする。
展開 (32分)	4 本時の学習課題を確認する。 5 チームごとに課題解決のための練習をする。 6 チーム対抗でゲームをする。
整理 (8分)	7 本時の反省と、次時の課題の確認をする。 8 挨拶、かたづけをする。

C-1 指導案

4 成果と課題

(1) 成果

- ・生徒自らが種目を選択することで学習活動に対する意欲の高まりが感じられた。自主性が高まり、授業の準備や後始末が早くなり、グループごとの準備運動も声を出して的確に行うことができた。
- ・グループで練習やゲームを進めていくうちに、ゲームで勝ちたいという気持ちが生じ、練習に対する意欲が高まり、男女を問わず声をかけあったり、応援したり、喜びあったりする姿が見られようになり、生徒間のつながりが深まった。
- ・学習カードに記入させることで生徒の思いや考えがより明確になり、授業に取り組む生徒の状況が理解できた。さらにコメントを返すことで次の意欲につなげることができた。

(2) 課題

- ・練習内容や方法を考え工夫する力は、十分とはいえ今後さらに身につけさせたい。そのために学習資料や学習ノートを作成し、その活用を工夫し、生徒の自主的な活動を支援していく必要がある。
- ・一人一人が自己の能力に適した課題を設定し取り組むためには、個に応じた学習指導が大切である。これまで課題を達成できない生徒に対する支援は意識して取り組んできたが、十分達成できた生徒をさらに伸ばすための発展的な学習支援にも取り組んでいきたい。
- ・目標を達成するために授業で何を指導し、評価するかを事前に十分検討し授業にのぞんでいきたい。

事例23 題材「三脚椅子の製作」

めあてと見通しをもって取り組むものづくり

～ 指導と評価の工夫を通して ～

技術・家庭（技術分野）第2学年

小松市立芦城中学校・教諭

1 事例の概要

生徒のものづくりに対する生活体験が少なくなっている。本題材で使用するのこぎりやかんな等の工具に関する事前の調査では、のこぎりを使ったことがあると答えた生徒は80%、かんなを使ったことがあると答えた生徒は3%、タップ、ダイスという工具があることを知っていると答えた生徒はいなかった。生活の中での工具の使用経験は少ないものの、生徒のものづくりに関する興味・関心は非常に高い。本題材では、生徒の関心・意欲を大切にしながら、加工技術や工具の仕組みに関する基礎的・基本的な知識を理解させたり、材料に適した加工法の基本的な技能を習得させたりすることをねらいとしている。また、日常生活を見直し、課題を見つけ、自分なりに工夫・創造し解決できる能力を育てていきたいと考える。

そこで、題材の指導にあたっては、実践的・体験的な学習活動を工夫し、問題解決的な学習を導入するとともに、学び方ハンドブックを活用し、生徒に授業のめあてや課題を明確につかませるようにした。また、作業に不安のある生徒に対して確認コーナーを設けたり、作業状況を相互評価したりして、工具や加工技術に関する基礎的・基本的な知識や技術の確実な定着を図るよう工夫した。

2 実践内容

(1) 題材の目標

- ・木材や金属の加工技術に関心をもち、目的や条件に応じて、工具や機器を適切に活用し、三脚椅子を製作しようとする。
(生活や技術への関心・意欲・態度)
- ・三脚椅子の材料の特徴と加工の目的に応じて、工具の仕組みを生かした使い方を工夫する。
(生活を工夫し創造する能力)
- ・製作の目的と三脚椅子に用いるいろいろな材料に適した加工を行うことができる。
(生活の技能)
- ・けがき、切断、部品加工、組み立て、仕上げと続く各工程における加工技術に関する知識を身につけ、工具の仕組みについて理解する。
(生活や技術についての知識・理解)

(2) 指導上の工夫点

① 実践的・体験的な学習活動の工夫

事前アンケートにより、内容A「技術とものづくり」での興味・関心の高いところや、体験が少ないことは何かを把握し、その後の指導計画に生かすような工夫を取り入れてみた。さらに、体験の内容や難易度を見直し、時間内で生徒の作業が終了するような授業展開を考えて、ジグや学習プリントを利用することにより、つまずきの原因を極力少なくするよう努めた。

② 問題解決的な学習の導入

学習過程において問題解決的な学習の場を設定し、生徒が課題意識をもって実習や作業に取り組めるような授業展開を考えた。「どうすればいいのか」「こうしてみたらどうだろうか」といった素朴な疑問を解決する手だてを学習過程に取り入れることにより、工夫し創造する力を養うことを目指した。

③ 学び方ハンドブックの作成と活用

学び方ハンドブックを作成し、その題材を通して身につけてほしい資質や能力をわかりやすい形で生徒に提示するとともに、小題材の最初の授業でその題材のねらいや評価のポイントを押さえることとした。

④ 評価の工夫

ア 評価方法の工夫

授業における評価は、教師の評価と生徒の自己評価を基本として行った。生徒の相互評価は作業状況のチェックや作品鑑賞の時に行うこととした。評価の実施にあたっては、1時間の中での評価を段階的に行うことにより、1回目の評価をその時間内の指導に生かした。

イ 評価を生かした指導の改善

授業の最後に行う自己評価を参考に次時の授業展開を工夫した。教師の評価や生徒の自己評価に関してのデータは題材の指導計画表に転記し、長いスパンの授業改善に役立てるようにした。また、生徒に体験を振り返らせ、その時の思いや行動を客観的に評価させた。この評価の積み重ねから生徒の変容を見極め、体験活動の有効性を検証していった。

B—1 題材の指導と評価の計画

B—2 学び方ハンドブック

3 指導の実際

(1) 小題材名 アルミニウム材のめねじ切り加工

(2) ねらい タップによるめねじ切りの方法を理解し、アルミニウム棒材にめねじ切り加工ができる。

学 習 活 動	◇生徒の思考の流れ	○評価 ●支援 ・留意点
②ねじを切る方法を考える。 ③タップの使い方について知る。	◇ただの穴で、ねじができていない。 ◇案外単純な道具を使うんだな。 ◇こんな工具でねじができるのだろうか。	・各班で話し合っ、意見を出すように助言する。 ・示範を観察させ、ねじの加工の仕方のポイントを押さえる。 ●わからない生徒や作業に対して不安がある生徒には、もう一度示範を見せたり確認コーナーで試してみたりするよう助言する。
④アルミニウム棒材にめねじを切る。	◇部品をしっかり固定していないとうまくいかない。 ◇切りくずはどうなっているのだら。 ◇どこまで切り進んだらよいのだろうか。	○正しい方法でアルミニウム棒材のめねじ切り加工ができる。(生活の技能) 「相互評価・観察・加工状況チェック表(自己評価)」 ●1回目の作業後につまずいている生徒には個別に助言する。また、作業が最後までできなかった生徒には、つまずいている点を確認し、個別指導する。

C—1 指導案

C—2 本時のワークシート

C—3 相互評価表

C—4 自己評価表

4 成果と課題

(1) 成果

- ・ 目標設定の明確化や学び方ハンドブックの活用により、生徒が主体的に目的意識をもって製作や実習に取り組もうとする姿勢が強まった。また、その時間に身につけてほしい基礎的・基本的な事項を生徒と教師が共有し、意識しながら授業を展開することができた。
- ・ 評価活動を取り入れる場面や回数、項目数などを検討したことは、学習活動の中で生徒の変容を見て取り、次の課題の設定や指導の方向性を考えていく上で役立った。
- ・ 評価活動がその時間の作業進捗の目安となり、生徒の作業に取り組む意欲の向上につながり、作業進捗の差がこれまでに比べかなり少なくなった。また、評価規準に十分到達できるようにするにはどうすればよいかや、努力を要すると判断される生徒にどのように指導すればよいのかを考える良い機会となり、補充指導や次時の指導に役立った。

(2) 課題

- ・ 学習内容それ自体がどの程度生徒の身についたのか、そして実際に生活の場でどのように活用されたのかを把握し、指導計画等の検討の資料としていくことが大切である。
- ・ 1時間1時間の学習のめあてについても再検討し、それを効果的に生徒に提示し、目標を達成しようとする生徒の意欲につなげるような工夫を考えていく必要がある。
- ・ 学び方ハンドブックに関しても、内容をもう一度確認・修正するとともに、生徒への有効な提示の仕方や活用方法などを継続して検討していく必要がある。

人とのかかわりを大切にする心を育む授業実践

～ 体験学習を工夫することを通して ～

技術・家庭（家庭分野） 第2学年
白山市立北星中学校・教諭

1 事例の概要

日々生徒達は、友達関係を形成したり、調整したりすることに多くのエネルギーを費やしている。この背景には、家族の形態の変化や価値観の多様化が進む一方で、家族のかかわりや地域のつながりが希薄化し、人とのかかわりを学ぶ機会や実体験が不足している現状があると考えられる。

また、少子化の影響からか、本校で実施したアンケート（2年生で実施）によると、身近に幼児がいる生徒の割合は31%、幼児に関心がない生徒は57%、さらに幼児に対してマイナスのイメージをもっている生徒が53%という結果であった。

そこで、本題材「わたしたちの成長と家族」では、子ども（自分）が成長する過程に触れさせること（幼児の擬似体験、遊び体験、保育体験学習などの体験学習の工夫）を通して、幼児や自分の成長に関心をもたせ、家族や周りの人々の存在や人とのかかわりの大切さを実感させたいと考えた。さらに、そのかかわりの中で支えられながら生きている自分自身を、かけがえのない存在としていとおしく感じる心（人間関係形成能力の基礎である自己肯定感）を育てることを目指して実践を行った。

2 実践内容

(1) 題材の目標

- ・自分の成長を振り返り、自分の成長や生活は、家族やそれにかかわる人々に支えられてきたことに気づく。
- ・幼児の観察や擬似体験、遊び体験を通して、幼児の心身の発達や幼児の遊びの意義について理解できる。

(2) 指導上の工夫点（視点）

① 問題解決的な学習の導入

- ・自分の成長をふり振り返り、幼児の心身の発達に関心をもたせるような体験を工夫し、幼児の発達や遊びについて自分なりの課題を見つけられるような学習の導入。

② 実践的・体験的な学習活動の導入

- ・自分の成長や、家族やそれにかかわる人々について考えさせるためのビデオ視聴。
- ・自分の幼い頃や幼児に関心をもたせるためのすごろくゲーム。
- ・幼児の心身の発達を理解させるための幼児の擬似体験・幼児観察・遊び体験。
- ・幼児の心身の発達を支える家族の役割を理解するためのロールプレイング。

③ 学習意欲を高める工夫

- ・自分の成長を実感できる写真、赤ちゃん人形、衣服、おもちゃなどの実物の提示。

④ 技術の定着を図る工夫

- ・意見交流の機会を大切にするための班活動や発表の場の設定。

⑤ 評価の工夫

- ・評価の観点の明確化。
- ・自己評価やグループ活動の中での相互評価の活用。

3 指導の実際

時間	学習活動	指導上の留意点	評価場面・評価方法
(分) 10	<ul style="list-style-type: none"> ・前時をふり返る。 ・学習の記録に学習内容を記入する。 ・本時の学習内容を知る。 「幼児の発達の特徴を知ろう」	<ul style="list-style-type: none"> ・幼児が描いた絵、紙芝居などを見せながら、自分の幼児期を思い出させ、幼児への関心を高めさせる。 	
30	<div style="border: 1px solid black; padding: 2px; display: inline-block;">体験</div> <div style="border: 1px solid black; padding: 2px; display: inline-block; margin-left: 10px;"> 幼児の発達の特徴を知ろう (キッズ体験) </div> <ul style="list-style-type: none"> ・自分の体験コーナーを決める。(各班ごとにくじ引きをする。) ・キッズ体験をする。(3分) <ul style="list-style-type: none"> ◇運動機能コーナー ◇体重コーナー ◇ウォッチングコーナー ◇ことばコーナー ◇幼児のからだコーナー 身長、手形、足形 	<ul style="list-style-type: none"> ・体験を通して、幼児の体の発達について考えることを確認させる。 ・体験マップで体験内容を確認させる。 ・一人ひとりが体験できるように、体験コーナーには年齢や発達段階が分かる資料や実物を複数準備しておく。 	評価場面 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-top: 10px;"> キッズ体験に取り組みわかったことを発表する場面 </div>

C-1 指導案

C-2 ワークシート

C-3 ワークシート (キッズ体験マップ)

4 成果と課題

(1) 成果

事後のアンケートより幼児に関心があると答えた生徒が77%、自分は家族に支えられて成長してきたことを実感できた生徒が91%に増加した。このことから、授業を通して、幼児や自分の成長、それを支えてくれた家族、周囲の人々とのかかわりに関心をもたせ、その大切さに気づかせることができたことを確認できた。また、保育体験学習において、新しい発見があったと答えた生徒の割合が、69%と予想に反して少なかったことは、事前に幼児の擬似体験をしたことによって、関心の無かった幼児が身近な存在となったことを表しているように思われる。さらに、保護者から学習したことを家庭で楽しそうに話していたことを聞き、家庭へとこの学習が広がったことも確認することができた。

(2) 課題

実体験の乏しい生徒達が増える傾向の中、この題材の学習の成果は、人間関係形成能力の基礎となり、人とかかわるあらゆる場面で応用されていく力となるものである。そのため、生徒のプライバシーに十分配慮しながら、家族関係や周囲の人々とのかかわり方を生徒自身が工夫し、自分の実生活に生かせるような指導法の研究を今後も継続していく必要がある。また、生徒の自己評価を生かした指導など、生徒の学習意欲を高めるための支援の方法についてもまだまだ不十分な所が多く、今後検討改善していきたい。

コミュニケーション能力の基礎を養うために

英語 第3学年

珠洲市立緑丘中学校・教諭

1 事例の概要

本校は、平成14年度から3カ年にわたって『学力向上フロンティアスクール』の研究指定を受け、一昨年度研究発表会を終えた。その間、英語科ではコミュニケーションへの積極的な態度を養うことを目指し、ペア活動やグループ活動を主体とした授業の在り方を模索し試行してきた。昨年度の3年生は、自分にとっては初めて授業を担当することになった学年であった。全体的に明るく落ち着いて授業に臨み、グループ活動にも意欲的に参加する光景がよく見られた。そのような生徒の変容から、『生徒どうしの学びあい』を視点を置いた本校の研究の成果を感じることができた。しかしながら、昨年5月に実施された基礎学力調査では、私たちの今までの取り組みが生徒の学力の向上につながっていなかったという結果が示された。「活動」の場面を中心に据えた授業実践をしてきたところ、生徒は楽しそうに活動していて、いかにも授業が活性化されたかのように教師が感じてしまったところに原因があったと思う。

そこで、基礎学力調査の結果を分析し、生徒の弱点を正確に把握し、課題を明らかにした上で、今後の学習指導に活用したいと考えた。とりわけ「書くこと」の領域においては、基本文型の語順の理解が十分とはいえなかった。さらに、「与えられた情報を基に、伝えたい内容を正しく書くことができる」ということをねらいとする問いには、英語を書くことに対する苦手意識が窺われたため、英文を書こうとする関心・意欲を引き出す工夫が必要であると思われた。また、まとまった量の英文の中から必要な情報を聞き取る力も十分に育っているとはいえなかった。

以上のことから、「基本文型の確かな定着とそれを活用する力の育成」と「聞く力の育成」を重点的に指導することを考えた。

2 実践内容

(1) 「書くこと」による自己表現活動

各単元のセクションごとに別紙資料①(C-2)のような基本文プリントを作成し、新出文型の定着を図った。理解の段階を踏んだドリル練習をした後、Step 3として自己表現課題に取り組みさせた。書くためのツールと内容を明確に示し、段階的な指導を行うことで、まとまりのある英文を書くことをねらいとした。主に、家庭学習としての課題であり、英語を苦手とする生徒にとってはハードルの高い取り組みであった。そのため、時には例文を示し、英文の一部をアレンジする形で書くことを指導したこともあった。課題はノートに書かせ、その都度添削して返した。その際、書かれた内容に関する感想等を付け加え、コメントによる意欲づけを行った。また、定期テストで出題する等、「書くこと」への意欲を喚起した。

(2) ALTによるSmall Talk

本校では、週に2回ALTが訪問する。この機会に、ALTにSmall Talkを行ってもらった。まとまりのある英語を集中して聞く練習を行い、聞く力を育成することをねらいとした。これまでに学習した表現やその日に学習する内容を盛り込みながら、Talkの話題をALTに考えてもらった。時には、その日の学習内容とは直接関係しないこともあったが、ALT自身の体験談や別紙資料②(C-2)のようなALTの自国に伝わる迷信等、生徒にとっては興味深い内容のものが多かった。基本的に月に2度の割合でALTにSmall Talkをしてもらった。聞いた後で、T/Fで内容理解の確認を行った。この取り組みに関するアンケートでは、70%以上の生徒が「役に立つと思う」と答えていた。

3 指導の実際

(1) 基本文プリントの活用

セクションごとの基本文プリントは、新出文型の確かな定着を図り、「書くこと」による自己表現力を育成することをねらいにして取り組んだ。1時間の授業の中では、「新出文型の口頭による導入」⇒「新出文型を含んだ活動」⇒「文法説明」⇒「基本文プリント」のような流れで授業を展開し、まとめの段階で活用することが多かった。Step 3の自己表現課題に取り組むときには、大いに辞書の活用を促した。生徒は辞書の例文の中から、必要な語彙や自分の気持ちに近い表現を見つけ出しながら課題に取り組んでいた。提出された英作文は「コミュニケーションへの関心・意欲・態度」と「表現の能力」の2観点において、それぞれA（十分満足）、B（おおむね満足）、C（努力が必要）の3段階で評価を行った。

(2) ALTによるSmall Talk

この取り組みは、主に授業の最初のWarm-upで実施した。回を重ねるごとに、生徒の聞き取ろうとする姿勢が目に見えて良くなってきた。

あんまり中身は分からないけど、英語の音に慣れるから役に立つと思う。

ALTの〇〇先生の英語はつながっていて聞き取るのは難しいけど、絵を見せてくれるのでそれを参考にして聞き取ることができた。

けっこう長い話だから聞く訓練になる。

分からなくても聞き取ろうとするから、けっこう勉強になる。

C-1 指導案

C-2 ワークシート①②

4 成果と課題

(1) 成果

基礎学力調査の結果から見えてきた生徒の弱点を克服するために、2つのねらいをもって指導の重点化に努めてきた。基本文プリントの取り組み方を見ていると、配付されると同時にすばやく取り掛かり、英語を苦手とする生徒もStep 1と2は自力で頑張る姿が見られた。授業のリズムを作る上でも効果的に活用できたと思う。また、定期テストでの自己表現力を見るための課題英作文への意欲も感じられた。文のつながりが不自然なものや語順に誤りがあるものなどがあるが、無答率は確実に減ってきた。英文を「書こう」という関心・意欲の高まりを感じることができた。

ALTのSmall Talkは、生徒の聞く姿勢に変容が見られた。知っている単語を聞き取ることができたときに見せる一瞬の表情やうなずきなど、集中して話を聞いているのがよく分かった。話の内容は生徒の視野を広げ、他国の異文化理解に役立ったと思われる。

(2) 今後の研究の方向性

私たちは今目の前にいる生徒に「どんな力をつけさせたいか」という明確な目標を持っていないといけない。1年生での理想とするゴールはどこなのか、卒業するときにはどんな力をもって卒業させたいのかという学年ごとの理想とするゴールを明確にもちながら、コミュニケーション能力の基礎となる「聞くこと」「話すこと」、その活動を支える「読むこと」「書くこと」の4領域の力をバランスよく総合的に伸ばすことを考える必要がある。そのために、今一度、本校の観点ごとの評価規準と実際の指導がつながっているかを見直し、つけたい力の系統性を明確に持ちながら3年間を見通した指導ができるように検討していきたい。

「心に響く道徳」の授業実践

道徳 第3学年

津幡町立津幡中学校・教諭

1 事例の概要

道徳の授業とは、生徒たちが資料を通して、自分の心を磨き高める時間だと言える。資料の主人公の行為や気持ちについてクラス内で友達と話し合うことにより、主人公と同じ状況のときの自分自身の行為や気持ちを考えながら価値を内面化する。そして、資料の主人公に共感しながら道徳的価値について思考・判断し、その価値を主体的に自覚するようなものでなければならない。したがって、「心に響く道徳」の授業とは、生徒が資料の主人公と一体化しながら、人間としての在り方や生き方の基礎となる道徳的価値を学び、その価値について自覚を深める授業でなくてはならないと考える。

2 実践内容

(1) 指導上の工夫

① 「心に響く道徳」の授業を実践していくにあたって

生徒たちにとって「心に響く授業」を実践するに以下のことが重要であると考えた。

- ・生徒の実状をふまえ、今何を考えさせるべきか教師の「思い」「ねらい」が明確な授業
- ・生徒の興味・関心を引く資料、素材の開発、工夫
- ・生徒同士での意見交流、心の交流が行える（グループ学習等）授業形態の工夫

② 「心のノート」を活用

実態から考えると、「心のノート」を上手く活用できている状況とは言えないが、以前と比較して、使う頻度は多くなってきた。それは、心のノートに記載されている言葉を使って本時のねらいや本時の価値内容項目をまとめることで、生徒がより身近に授業での道徳的価値を受けとめられるようになってきたからである。また、心のノートを活用した個に応じた指導に取り組むことにより、教育活動全体との関連及び、家庭との連携を図りながら道徳的实践力を高めることができると思う。

③ 評価の工夫について

学習指導要領に「道徳の時間に関して数値などによる評価は行わないようにする」と記されている。評価においてはワークシート等により一人一人の価値の自覚の深まりをとらえ、道徳的な心情、判断力、実践意欲などの高まりを見取りながら、指導と評価の一体化を図っていきたいと考える。そして、指導方法の改善、授業後の個に応じた指導に生かしていきたい。

3 指導の実践例

(1) 目標

- ・より高い目標を実現するために、自分のもっている力を精いっぱい発揮して、最後までやりぬこうとする心情を育てる。

(2) 展開

学 習 活 動	時	生徒の主な意識の流れ	支援と評価
1. 目標を達成できなかった経験を話す。	10	(目標を決めたのに、できなかったことあるかな) ・あるよ、マラソン大会で思っていた順位にはならなかった。 ・漢字テストもそうだよ。	・目標を達成できなかった経験を振り返えさせることで、できなかった原因に目を向けさせる。

<p>2. 「原田選手のジャンプ」について話し合う。</p> <p>・オリンピック選手になるまでの努力</p> <p>・リレハンメルでのジャンプ失敗</p>	<p>25</p>	<p>(この映像を見てごらん)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・スキーのジャンプだ。 ・この人、知ってるぞ。原田だ。 <p>(オリンピックに出るために原田選手はどうしたのかな)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・日本の代表なんだから、きっとすごく練習したと思う。 ・イチローのように努力し、工夫したと思う。 <p>(原田選手は金メダルを取れたかな)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・取れたよ。 ・取れないよ。 ・実は失敗してしまったんだな。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ビデオ映像を見せてジャンプのイメージをつかませる。 ・努力について想起させ、オリンピックの選手になるまでの原田の努力を想像させる。 ・資料を読み、中学生でもとべる距離で金メダルだったという状況をつかませる。
---	-----------	--	--

C-1 指導案「目標に向かって～原田選手の涙～」

C-2 指導案「かけ合う一言の大切さ」

4 成果と課題

(1) 成果

グループ学習を意図的に行うことによって、生徒一人ひとりの考えの共有が小グループでできた。また、その後の課題解決学習へと、クラス全体としての意識がまとまっていった。生徒の挙手・発言をリレー形式で行うことによって、様々な意見、感想が話し合うことができた。そして、時間配分も上手くとることができた。グループ学習 ←→ 個人で考える場といった授業形態を随時変えていくことで、「間延び」しない授業を実践することができたといったことが挙げられる。ここでは、オリンピック、スキージャンプの日本代表選手、原田雅彦氏を取り上げた。原田氏について子ども達は、テレビや新聞等のマスコミで知っているかもしれないが、長野オリンピックで金メダルを取るまでの挫折感を乗り越えた努力については知らないと思う。4年に一度しかないオリンピックの本番で金メダルを目前にジャンプで失敗し(リレハンメル)、チームに迷惑をかけたという屈辱をばねに、その後の4年間、想像を絶するような努力をしたこと大きなプレッシャーの中、目標に向かってひたむきに努力し戦っていたことを知る。生徒はすぐに効果があがらないと投げ出す自分の努力の足りなさや、失敗するとすぐにあきらめてしまう自分の姿をふりかえることができ、困難にぶつかった時にどうする(どう生きる)ことが大事なのか気づくことができた。

(2) 課題

道徳の授業は、教師自身が難しいと捉えてしまうと、生徒達にとっても難しくなってしまうものである。授業における「ねらい」を明確にし、どういう心を育みたいか、大きな視野、そして流れで教材研究することが大事になってくる。また、生徒たちが目を輝かせて学習問題に取り組めるように、素材や学習問題の工夫も重要になってくる。生徒たちの道徳における、興味・関心を上手く引き出すことが我々教師にとって急務なことであり、今後の課題になると考える。「人間性豊かな心」を育むため、私なりに「心に響く道徳の授業」をモットーに授業を行っているわけであるが、いくつもの課題が見えてきたのも事実である。とくに、生徒が将来に向けての実践的な力を育むための授業づくりが大事である。また、授業において本音が語り合えるようなクラス作り、雰囲気作りが大事であると思う。「みんなちがってみんないい」そんな価値観を生徒たち皆が共有できれば、道徳の授業が「いつも楽しい、面白い」「将来自分にとってきっと役立つ時間」と思えるようになるのではないだろうか。このような授業づくりを目指しているが、現実には思うように進まない。事例のねらいにあるように目標に向かって最後まであきらめない強い意志を持つことから、道徳的な実践力の育成につながるような、生徒のよりよい変容をしっかりと見つけ、捉えられることが課題である。

こんな私になりたい

～ 自分の良さを理解し、将来について前向きに考え、行動することができる力の育成 ～

特別活動 第3学年

内灘町立内灘中学校・教諭

1 事例の概要

進路について前向きに考えるために欠かせないのは、「肯定的自己理解」と「自己有用感」であると考え。4月初めに「今の自分が好きですか」と問いかけてみたところ、学級の生徒の7割程度が「好きではない」と答えている。「どうせ自分なんて」と自分自身のよさを認めることができない生徒に、前向きな進路選択ができるだろうか。そこで、まず自分自身の良さに気付かせること、そして「なりたい自分」像を探させ、その姿に近づくためにはどんな努力が必要なのか、今の自分の何を変えていく必要があるのか（ないのか）を見つけさせていきたい。以上のような思いから、このテーマを設定した。

特別活動の「内容」は、学級活動・生徒会活動・学校行事の3つに分かれるが、今回目指しているような力を育成するためには、このうちのどれか1つに絞ることなく、学級経営・学年経営を基盤として、3つの分野で有機的に指導していくことが不可欠であると考え、進めている。

2 実践内容

(1) 生徒につけたい力

- ① 人間関係形成能力 ② 情報活用能力 ③ 将来設計能力 ④ 意思決定能力

(2) 取り組みの内容

- ・学級活動、道徳、総合的な学習の時間、教科における年間計画を立てる。上記のつけたい力は、個々の時間で育てられるものではなく、学級活動、各教科、道徳、総合的な学習の時間等、学校の全教育活動を通して育成されるものであると考える。
- ・以上のうち、メインとなるもの(学級活動)について、各月の学年会で提案していく。
- ・学年での連携を大切に話し合いにより、一つ一つの出来事について、ベストの道を探る。
- ・学級目標の実現に向け、あらゆる活動を結びつけ、点検・修正していく。
- ・日々の活動の充実……点検と振り返り(朝ホーム・帰りホームの充実)
- ・月ごと(週ごと)の目標の設定
- ・学級便りを通じた保護者との連携

B-1 生徒につけたい力

B-2 年間計画

B-3 代議員会の取り組み

3 指導の実際

(1) 人間関係形成能力をつけるための場面と指導内容

- ・周囲と関わる状況を意図的に設定する
 - 「生活班の活用……班内での役割分担、1ヶ月ごとの座席替え」
 - 「給食中の会話……教師が間に入って(意図的に気になる生徒の近くに座る)」
 - 「授業中に話し合い活動の場をできるだけ多く設定する」
- ・一人一人にスポットライトを当てる工夫を行う
 - 「名言……生活記録ノートからピックアップして帰りホームで紹介・掲示」
 - 「掲示の工夫……一人一人のコーナー(短いコメントを書いて入れる)」

「学級便り………できるだけ個人名を出し、うれしかった事を伝える」

「個々の生徒の特性を生かせる活躍の場がないか、常に考え、促す」

・ピア・カウンセリングの実施

・良いところ探し

「1学期：『仲間』………修学旅行の振り返り」

「2学期：『感動』………体育祭・合唱コンクールの振り返り」

「3学期：『感謝』………ありがとうカードの作成」

・三大大行事(修学旅行・体育祭・合唱コンクール)を通して集団としての力を高める

「それぞれにおいて、ねらい(つけたい力)を明確にして取り組む」

「事前学習・事後の振り返りの充実を図る」

「結果より過程を大切にする」

(2) 意思決定能力をつけるための場面と指導内容

・自分を見つめる場をできるだけ多く設定する

・「こんな私になりたい」………学期ごとに実施

・ピア・カウンセリング………学期ごとに実施

・定期相談の充実

C-1 学級目標の振り返り

C-2 こんな私になりたい

C-3 学級便り

4 成果と課題

(1) 成果

① あるべき教師の姿勢について学年で共通理解を図れたこと

・信頼関係を何より大切にすること………教師と生徒、生徒と生徒

・教師がまず、手本を見せること………相手を尊重した接し方、プラス思考の考え方

・「結果」より「過程」を大切にする姿勢

上記の3点について特に、学年間で共通理解ができ、生徒一人一人を部分ではなく全体として捉え、生徒の良さを認めることができた。また、その時点でのベストの道を探していくこと、生徒一人一人を学級の中に取り込む工夫の大切さも共通理解できた。

② 生徒の確かな成長

今より悪くなりたいと思っている生徒は一人もいないのであって、生徒を信じ、できるだけ生徒に任せることで、生徒は多様な活動の場で大きな力を発揮することができた。また、注意されてから直したり、動いたりするのではなく、自分で判断して動ける生徒の割合が少しずつだが確実に増えてきてる。また、お互いに自然に声かけをする場面も見られるようになった。

(2) 課題

・学級内での目立つトラブルはなかったものの、お互いをまだ信用しきれず、自分の良さを十分に発揮できないまま1学期を終えてしまった生徒もいる。体育祭の取り組みや合唱コンクールを通して、より円滑な人間関係を結び、互いの理解が深まるよう、様々な場面を意図的に設定し、できるだけ生徒たち自身の力で乗り越えさせていきたい。

・今後も更に、一人一人の生徒が、小さくてもスポットライトを当てられる場面を工夫し、自己肯定感を感じられる場を多く作り出してしていけるよう努力しなければならない。

・卒業、進路決定の時期になったが、まだ自分の目標をしっかりと定めることができない生徒もいる。個々への働きかけと共に、あらゆる時間での「生き方」学習に今後も力を入れ、自分の将来についてより一層真剣に考える雰囲気をつくっていききたい。学級の生徒全員が自分自身で進路を選択し、その実現に向け前向きに取り組んでいけるよう、最大限の支援をしていきたい。

主体的で感性豊かな生徒の育成

総合的な学習の時間 第1～3学年
金沢市立紫錦台中学校・教諭

1 事例の概要

本校では、「生きる力」のひとつに、「個性を發揮し、他者と協力しながらものごとを創造する力」があると捉えた。その創造の源となるものが、ものごとに感動し、感覚的にとらえて表現できる力、つまり「感性」であると考えた。そこで、感性を豊かにすることが、生きる力の育成につながるとし、上記の研究主題を掲げた。「総合的な学習の時間」において教科の枠をこえ、教科で身につけた知識・技能が相互関連的、総合的に働くという相乗効果をめざしたテーマの設定や学習活動を取り入れるとともに、「総合的な学習の時間」で得られた感動体験や培った感性、自己表現力等を教科の学習や生活の中に生かし、教科学習と現実の社会や生活とを結びつける学習をめざしている。

多くの感動体験や経験があればこそ、現代社会での活動においても、「さらに学びたい」「わかりたい、一緒に活動したい」という学習への意欲が生まれる。意欲的に活動し、創造性を發揮できるように努め、知性、感性、社会性のバランスがとれた生徒の育成をめざした。「総合的な学習の時間」を中心に、特別活動や教科学習との連携における学校の主体的なカリキュラムの研究・実践を進めてきた。

A-1 「総合的な学習の時間」の基本的な考え方と全体像

2 実践内容

(1) 単元の目標

- ・感動体験や培った感性、経験、自己表現力を、各教科での学習や今後の生活に生かす。
- ・教科学習と現実の社会や生活を結びつけることができる学習活動をつくりだす。

(2) 指導上の工夫点

- ① 「総合的な学習の時間」のテーマ設定
 - ・学年ごとに、「ふれる」「さぐる」「みがく」の領域ごとに大テーマを設定する。
 - ・大テーマの中で、活動班ごとに小テーマを設ける。
- ② 「総合的な学習の時間」の視点からの取り組み
 - ・小テーマの一覧表を作成する。
 - ・小テーマと関連した教科学習の内容を細かく洗い出し、教科の学習で取り上げたり、小テーマで活動する生徒にアドバイスする。
- ③ 教科の視点からの取り組み
 - ・教科と「総合的な学習の時間」との関連を洗い出し、教育課程の中に位置づける。
- ④ 評価の工夫
 - ・「飛梅(とびうめ)のあゆみ(ポートフォリオ)」による生徒の学習の軌跡を自己評価するとともに、指導者とのコミュニケーションを図る

B-1 テーマの領域と教科との関連図

B-2 「総合的な学習の時間」の視点から

B-3 教科の視点から

3 指導の実際

英語科の学習

生徒の活動	教師の支援・評価	時間
課題：金沢の文化を紹介しよう		
	※副読本：金沢市が作成した 「This is KANAZAWA」をさす	10分
①Chapter-1、2の復習をする。	副読本の文章をもとに金沢の文化を紹介する。	
②自分やグループのワークシートをもとにして金沢に対する意見や思いを発表する。班でより多くの意見を発表する。	・“Kenrokuen” ”Gold leaf” ”Kaga food” ”the Hyakumangoku Festival”の各項目に対する意見や思いを発表させる。	25分
③出し合った意見や思いをもとに、金沢の紹介文をみんなで協力して1つをつくりあげる。	・黒板にまとめた意見や考えを1つの紹介文にまとまるようコーディネートして発問する。	15分

C-1 指導案

C-2 飛梅タイム年間予定と活動

4 成果と課題

(1) 成果

生徒に対して行った「感じ方調査」のアンケート結果からは、学年による数値の違いはあるが全体として高い数値を示しており、3年間を通して順調に「感性」が育っていることが読みとれる。飛梅タイムが「充実していた」と答えた生徒は83%で、その主な理由に「知らなかったことがわかり、おもしろかった」「教科の学習ではできない体験、発見ができたから」という理由が過半数を占めている。さらに、「人と協力して活動できた」こともあげられており、本校の「生きる力」のひとつに「個性を発揮し、他者と協力しながらものごとを創造する力」があると捉えている考えに沿ったものになっている。このことは、「総合的な学習の時間」、教科学習、学校行事等を連携して行っている成果と捉えることができる。

また、【「総合的な学習の時間」に生かせる教科の視点で見た学習内容の一覧】をもとに【「総合的な学習の時間」の視点から、テーマと関連する教科内容の一覧表】を作成した。中学校では、教科学習内容を他教科の教師は深く理解していない傾向があるが、この資料を作成することにより、テーマに関連する教科の学習内容を本校の教師間で共有化し、学習内容や方法が「総合的な学習の時間」と教科の学習内容との間に関連したものが多くあるという認識により、教師自身が意識しながら双方の指導にあたったことは有意義であり、教科学習の確かな学力の定着に役立ったと考えることができる。

(2) 課題

感じ方調査の「感性」の中における「表現」がどの学年においても低い数値となっていることがあげられる。学習を通してつけた力を生かすことができるように、意識的に「総合的な学習の時間」と連携した学習を日常的に展開しなければならないと考える。また、学校生活全般においても学んだことを生かすために、各場面で生徒が積極的に活動するような場を支援していきたい。教科と「総合的な学習の時間」との連携をさらに進めていくためにもテーマ設定や活動の充実、広がりを図っていく必要がある。

今後の課題としては、7年をかけて定着を図ってきた成果を土台として「総合的な学習の時間」をさらに充実させなければならない。そして、以下のような観点で「総合的な学習の時間」と教科との相互関連の中から「確かな学力」の定着と向上をめざしていきたい。

○テーマ設定の工夫や教科教育との関連

○学年によるステップアップのシステムづくり

○地域とのさらなる連携強化

○テーマ実現のための人的、物的環境整備

D-1 飛梅タイム生徒アンケート結果

D-2 感じ方調査（感性テスト）の結果